

諏訪市埋蔵文化財調査報告第19集

千鹿頭社Ⅲ

——長野県諏訪市千鹿頭社遺跡第4次発掘調査報告書——

1990. 3

諏訪市教育委員会

諏訪市埋藏文化財調査報告第19集

千鹿頭社Ⅲ

——長野県諏訪市千鹿頭社遺跡第4次発掘調査報告書——

1990. 3

諏訪市教育委員会

CHIKATOU-SHA vol. III

**AN ARCHAEOLOGICAL SURVEY OF
ANCIENT SETTLEMENT AT CHIKATOU-SHA
NAGANO-PREFECTURE, JAPAN**

1990. 3

**THE BOARD OF EDUCATION
OF SUWA CITY**

序

諏訪湖を中心にひろがる諏訪盆地の南西部、西山地区に千鹿頭社（ちかとうしゃ）遺跡は位置しています。西山一帯には、縄文時代以降各時代にわたる数多くの遺跡が知られており、本遺跡もこれら遺跡のうちの一つです。

今回、住宅建設に先立つ緊急発掘調査が行われた結果、縄文時代前期の小竪穴などの遺構や、土器片・石器類などの遺物が検出されました。住居跡は検出されませんでした。30メートルほど離れた地点では、過去の発掘調査で縄文時代以降非常に長い間にわたる人々の住居の痕跡が、積み重なるように見つけられており、古代の人々の生活空間の利用のあり方について興味深い結果となっています。これらの成果を、今後の遺跡の保護に役立てていきたいと思えます。

本調査は、国庫および県費補助事業として実施したものであり、文化庁・長野県教育委員会と関係者・担当者の方々には特にお世話になりました。また、調査に際して全面的に御協力をいただいた地権者の方に心から御礼を申し上げますと共に、献身的に調査に携わられた調査団および調査関係者各位の御努力に対し、深く感謝申し上げる次第です。

平成2年3月30日

諏訪市教育委員会
教育長 両角久英

例 言

1. 本書は長野県諏訪市豊田に所在する「千鹿頭社（ちかとうしゃ）遺跡」（全国遺跡地図長野県番号8056・諏訪市遺跡番号305）の第4次発掘調査報告書である。
2. 本調査は、住宅建設工事に先立つ緊急発掘調査であり、平成元年度国庫および県費補助事業として諏訪市がこれを実施した。
3. 発掘調査は諏訪市教育委員会が調査団を編成して行い、現場における発掘作業を平成元年12月6日から12月13日まで、整理作業および報告書作成作業を12月14日から平成2年2月まで諏訪市体育施設管理棟で実施した。
4. 本調査におけるレベル原点は標高海拔789.878mであり、本書に記載した水系レベル等は、この原点を基準とした数値（±cm）で表示した。
5. 現場における記録と整理作業の分担は次の通りである。
遺構等実測…小松・関・原・田中・平林・五味、遺物水洗注記・土器拓本実測トレース…小松・関・原・五味、土師器実測…亀淵均、石器実測トレース…高見俊樹・五味、写真撮影…五味
6. 本書の執筆は、Ⅴを宮坂光昭・Ⅳ石器を高見・前記以外と編集を五味が担当した。
7. 発掘調査および報告書作成に際し、調査・整理参加者のほかに小泉精平・藤森与一両氏（敬称略）の御協力を得た。記して感謝申し上げる。
8. 本調査の出土遺物と踏記録は、諏訪市教育委員会が保管している（遺物注記 STKA 4区）。

目 次

序	
例言	
目次	
I 調査にいたる経過	
1. 保護協議の経過	1
2. 調査組織	1
II 調査状況	
1. 調査の方法と概要	1
2. 調査日誌	2
III 位置と環境	
1. 遺跡の位置と環境	2
2. 過去における発掘調査	4
3. 発掘区の位置と基本層序	4
IV 遺構と遺物	
1. 小竪穴	8
2. 一括土器	9
3. 黒耀石集中	12
4. 配石遺構	14
5. 暗渠廃水	14
6. その他の出土遺物	16
V 調査のまとめ	22
主要参考文献	24
写真図版	



I 調査にいたる経過

1. 保護協議の経過

昭和63年11月、地主である小泉清一氏より農地の宅地への転用申請が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である千鹿頭社遺跡の範囲内に含まれていたため保護協議を行った結果、諏訪市教育委員会が事前に発掘調査を行い、記録保存をはかることとなった。この発掘調査は、平成元年度国庫および県費補助事業である「千鹿頭社遺跡ほか発掘調査事業」の一部として行うこととし、市教委では調査団を編成して事業にあたった。

補助事業決定の経過（抄）

平成元年4月16日付元教社第16号平成元年度国宝重要文化財等保存整備補助金交付申請書

同第18号文化財保護事業補助金交付申請書（県費）

平成元年7月18日付元教文第1-23号国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知書

平成元年9月11日付長野県教育長指令元教文第2-12号（県費）

2. 調査組織

清水遺跡調査団（3区3次）

団 長	両角久英	（諏訪市教育委員会 教育長）
副 団 長	三ツ橋収	（諏訪市教育委員会 教育次長）
調査主幹	宮坂光昭	（諏訪市文化財審議委員・日本考古学協会会員）
調 査 員	五味裕史	（諏訪市教育委員会 学芸員・長野県考古学会会員）
調査団員	小松とよみ・関 喜子・田中 由・原 敏江・平林和子	

事務局

事務主幹	小平 武	（諏訪市教育委員会 社会教育課長）
事務局長	小松勇次	（諏訪市教育委員会 社会教育係長）
事務局員	里見雄治	（諏訪市教育委員会 社会教育係）
	久保田由紀子	（諏訪市教育委員会 社会教育係）
	五味裕史	（諏訪市教育委員会 社会教育係）

II 調査状況

1. 調査の方法と概要

調査は、調査区の地形にあわせて2m方眼のグリッド枠を組み、任意のグリッドを掘り下げる方法で行った。その結果、D・Eライン上で小竪穴2基（うち1基は縄文時代前期に属すると思われる）・配石遺構1基・黒曜石片および石鏃の集中か所が検出されたほか、3Cグリッドにて凹石を伴う縄文時代前期の一括土器が、4・5Dグリッドおよび5Fグリッド等において暗渠排水が検出された。また、各グリッドにおいて縄文土器片・石器類・土師器片・須恵器片等の遺物が検出された。

2. 調査日誌（抄）

- 12月6日 器材搬入・グリッド設定を行い調査開始。各グリッド掘り下げ開始したが、3Cグリッドにて縄文前期と思われる深鉢の一括出土をみる。他の各グリッドにおいても縄文土器片・黒曜石片等検出。
- 7日 3Cグリッド一括土器取り上げ。骨片(?)および凹石を伴っている。4Dグリッド東側にて人頭大の礫群を検出。2Dグリッド南壁上にて小竪穴を1基検出。また、2Dグリッド南東部にて複数の礫を検出。2ライン南壁セクション図作成。
- 8日 Dライン西壁セクション図作成。4Dグリッド付近でガニ水道(暗渠排水)検出。4Eグリッドより黒曜石剥片が集中して検出される。石鏃未製品または失敗品と思われるもの含む。また、同グリッドにてロームを掘り込んだピットを1基検出する。
- 9日 雪の舞う中調査を続ける。2Dグリッド小竪穴完掘(1号小竪穴)。3E拡張部からも黒曜石フレイク等多数出土。また、黒曜石集中に隣接して土師器・須恵器片の検出をみる。
- 11日 各グリッド拡張・掘り下げ続行。5Fグリッド平面図作成。
- 12日 D・Eライン上礫群を1号配石と命名、平面図・エレベーション図作成。全測図作成。埋め戻し開始。
- 13日 埋め戻し終了。機材撤収を行い、現場における作業を終了した。

Ⅲ 位置と環境

1. 遺跡の位置と環境 (第1・2図)

千鹿頭社遺跡は、諏訪盆地南西側を画する守屋山等の山塊の山地末端部、標高約780~820mの北東~東向き of 緩やかな斜面上に位置している。千鹿頭神社を中心としたこの一帯は、中沢川が山地から平坦部に流れ込む地点に発達した扇状地の北半部にあたり、千鹿頭神社周辺には湧水が豊富である。現在は諏訪湖を北側400mほどにのぞむが、現在水田となっている遺跡直下東側の沖積地は、過去のある時期においては低湿地または湖中であつたと思われる。北側には著名な灰釉水鳥鈕蓋付平瓶が出土した鐘鋤場遺跡が、南側には縄文時代前期~平安時代にかけての集落跡である十二ノ后遺跡および女帝垣外遺跡・中道遺跡などが隣接している。千鹿頭社遺跡自体も、縄文時代から平安時代にかけての多数の遺構と膨大な遺物が検出されている過去の調査において明らかのように、古くからの集落跡である。なお、千鹿頭社遺跡と十二ノ后遺跡・女帝垣外遺跡は、実際には連続した一つの遺跡であると考えられており、中央道建設時の発掘調査においてもそれを裏付けるような結果が得られている。

この地区は、茅野市の杖突峠とならび諏訪盆地と伊那谷の間の主要な交通路である有賀峠への登り口であり、古代から政治・経済上重要な位置を占めていたと考えられ、南側の尾根端部には中世の山城である有賀城跡が位置しているほか、周辺遺跡の多くが縄文時代から近世にかけての複合遺跡となっている。従って、この地区一帯は古代から一大集落地として、人々の生活の中心地の一つであつたと思われる。



第1図 千鹿頭社遺跡の位置 (1/200,000)
諏訪教育会発行1/100,000図使用

2. 過去における発掘調査 (第3図)

本遺跡は、以前より地元の人々にも石器・土器が多く採集される場所として知られていたが、過去において何回かの発掘調査も行われている。以下、区・次を新たに整理しなおし、過去の調



第 2 図 周辺遺跡分布図 (S=1/10,000)

番号	遺 跡 名	立 地	旧石器	繩 文						弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世
				早	前	中	後	晩	中後						
301	神 送 り 山	山 頂				●	●						●	●	
302	鑄 揚 げ	丘 陵	●	●											
303	瓶 贈	原 丘			●				●				●		
304	鐘 鑄 場	丘 陵		●	●	●	●		●	●			●		
305	千 鹿 頭 社	扇 状 地		●	●	●	●		●	●			●	●	
306	十 二 ノ 后	扇 状 地	●	●	●	●	●		●		●	●	●	●	
307	女 帝 垣 外	山 麓			●	●							●		
308	女 帝 塚	山 麓			●					●			●		
309	久 保 塚 古 墳	山 腹								◎					
310	丹 羽 屋 敷	山 麓											●	●	
311	清 水	山 麓		●	●	●	●	●	●				●	●	
314	有 賀 城 跡	山 頂											●		
315	中 道	山 麓			●					●					
316	鐘 鑄 場 古 墳	丘 陵									◎				

査を略述する。

昭和43年5月、宅地造成に先立つ調査が行われ、縄文時代中期後半および古代（真間期）の住居跡が各1基検出された（0区・第0次調査）。なお、この調査は宮垣外遺跡の名称で行われている。（宮坂1969）。

昭和49年9月～10月、中央自動車道建設に先立つ調査が長野県中央道遺跡調査会により行われた（1区第1次調査）。1区は遺跡西端部に位置し、調査の結果、縄文時代前期前葉～後葉の住居跡6基・集石遺構2基（1基は時代不明）・縄文中期と後期の土器集中箇所2基・古墳時代の住居跡6基が検出された。縄文時代前期については、中越期・神之木・有尾期の良好な資料が得られており、概期の当地方の様相を考えるうえで貴重な成果となった。また、当地方では量的に少なかった縄文時代後期前葉～中葉の資料が纏まって得られた点、古墳時代初期の住居の検出など、みるべき点が多い。この時には同時に隣接する十二ノ后遺跡等も調査が行われ、やはり縄文時代から古代にかけての遺構・遺物が多量に検出されており、この扇状地上が大集落地であることが確認された（県教委ほか1975）。

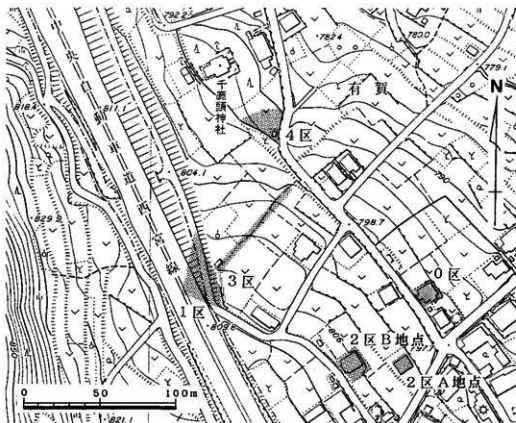
昭和63年2月および同年5～6月には住宅建設に先立つ調査が市教委によって行われた（2区A/B地点・第2次調査）。位置は遺跡南端部の、十二ノ后遺跡との境界部周辺にあたり、A地点では縄文時代中期後葉および平安時代の住居跡が各1基検出された。B地点では、縄文時代の住居跡9基・平安時代の住居跡1基・小竪穴10基と、多量の遺物が検出された。遺構・遺物のほとんどは縄文時代前期初葉から後葉に属するものであり、現在整理作業中であるが、中越・関山期の一括資料を出土した火災住居など、良好な資料が得られている。

昭和63年～平成元年4月にかけては農道建設に先立つ調査が市教委によって行われた（3区第3次調査）。この調査では、はからずも遺跡に巾4m、全長約100mのトレンチをいれる結果となり、過去の調査同様に遺構・遺物の非常に濃密な分布をみている。縄文時代～平安時代の住居跡約20基と、小竪穴約70基が検出された（整理作業中）。なお、3区の西側部分は、1区に隣接している。また以前、3区東側に位置している住宅建設を行った際、縄文中期中葉と思われる土器の集中出土をみたという。

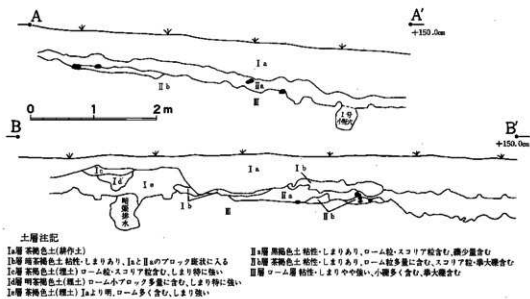
3. 発掘区の位置と基本層序

今回の発掘区は、遺跡範囲の中心、北東向きの緩やかな斜面上に立地する（第3図）。周辺部は畑地がほとんどであり、北西側に千鹿頭神社が隣接している。千鹿頭神社周辺は、扇状地の中心部からはやや外れ、凹地となっているが、4区はちょうどこの段差の直下にあたる。

調査区は、元は斜面上の1枚の畑であったが、戦後になってから重機を用いて数10cmの段差をもつ2枚の畑に造成したということであり、攪乱がローム層に達している部分がほとんどであったが、区域内北側においては耕作土（攪乱）—黒褐色土—茶褐色土（漸移層）—礫混じりのロー

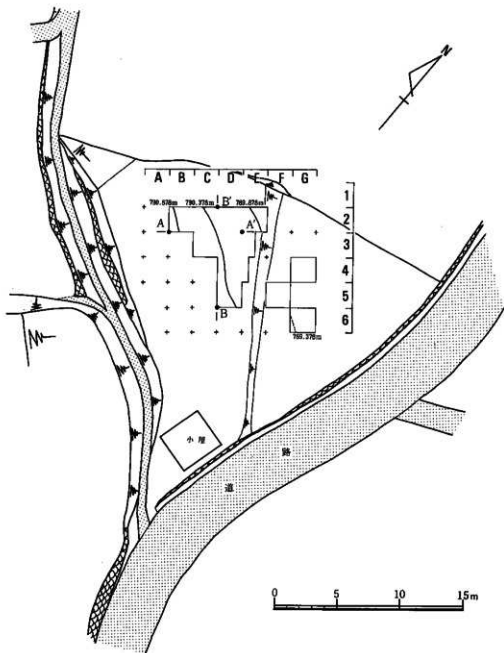


第3図 発掘区の位置 (S=1/2500)



第4図 土層堆積図 (S=1/60)

ム層という層序を示していた。この黒褐色土と同じ性格をもつと思われる層が過去の調査においても検出されているが、いずれも縄文時代前期の遺構が掘り込まれた層および概期の遺物包含層として把握されている。

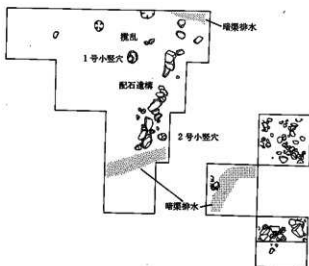


第5図 千鹿頭社遺跡4区区域全体図 (S=1/300)

IV 遺構と遺物

調査区は、現表下約数10cmでローム層に達するが、このローム土は拳大の礫を含んでおり、水の影響等を受けていることも考えられる。前述したように調査区は凹地に位置しているため、4・6Gグリッドでは掘り上げたローム上面の窪みに水が染み出るような状態であった。現状は畑であったが、暗渠排水が施されている点もこの調査区の特徴である。なお、区域西端の道際には、排水のためと思われる小溝が切られていた。過去の造成時の攪乱はかなり深く、特に南半はロームに達する攪乱を受けていた。

遺構は、D・Eライン上で小堅穴が2基と配石遺構が検出されたほか、一括土器・黒耀石集中・暗渠排水が検出されている。各時代の遺構が濃密に検出されている3区とは30m程しか離れていない本区における遺構のありかたは、千鹿頭社遺跡における集落限界、あるいは集落空間の利用について一つの新しい資料を提示するものと思われる。



第6図 千鹿頭社遺跡4区遺構分布図

1. 小堅穴

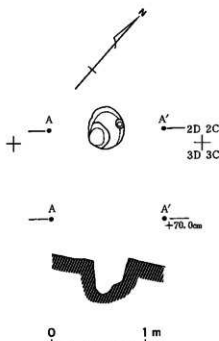
1号小堅穴 (第7図)

2Dグリッドと3Dグリッドの境界に位置する。平面形は円形に近く、2段の落ち込みを有する。小ビット状の落ち込みもあるが、木の根等による攪乱のようである。検出面はローム層上面であるが、Ⅱa層から掘り込まれている可能性もある。覆土は、ローム粒がわずかに多い程度で、Ⅱa層との判別が困難であった。遺構の規模などから住居跡の柱穴の可能性が想定されたため、Eライン部分の拡張を行ったが、対応すると思われる遺構は検出されなかった。

覆土中からは遺物は検出されていない。1号小竪穴の所属時期は、Ⅱa層との関係から、縄文時代前期と考えられる。

2号小竪穴 (第13図)

D・Eラインにおいて配石遺構の精査を行った際、4Eグリッドにおいて小規模の落ち込みがローム面に検出された。規模は、検出面において約25×30cmの不整楕円形で、斜面の上側に向けてやや斜めに掘り込まれており、覆土は、Ⅰa層に似た茶褐色土であった。覆土中から遺物は検出されなかった。本遺構は配石遺構に近い位置にあるが、両遺構の関係は明らかでない。レベル的には配石遺構確認面より2号小竪穴確認面の方が低いが、この付近はローム層直上まで耕作土である部分が多いため、層的に双方の関係を捉えることはできなかった。本遺構の所属時代は、遺物を伴わないため明確ではないが、近世、あるいはそれ以降である可能性が高い。

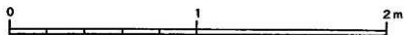
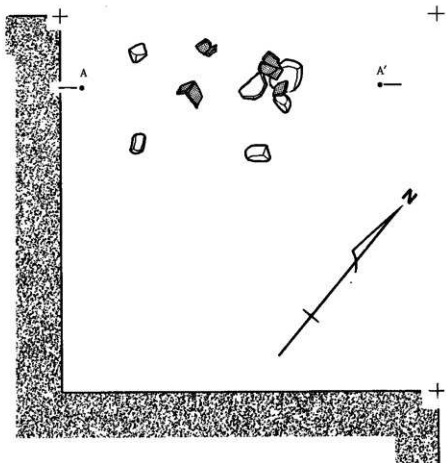


第7図 1号小竪穴平面図・エレベーション図 (S=1/40)

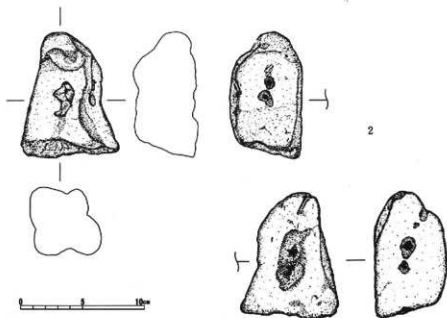
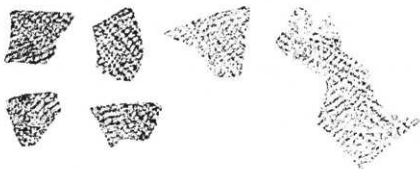
2. 一括土器 (第9・10図)

3Cグリッド北半のⅡa層中から、同一個体と思われる土器片が集中して検出された。3Cグリッド南半部は攪乱がローム層におよんでおり、土器検出部周辺のみⅡ層が残っている状態であった。土器片はほぼ同じレベルから検出され、凹石と平らな礫(鉄平石)をともなっていた。また、少量の骨片様の物が検出された。遺物取り上げ後精査を行いつつ掘り下げたが、床面等は検出されなかった。Ⅱa層は遺物包含層であり、包含層中の一括土器とも考えられるが、凹石等をともなっている点などから小竪穴などの遺構に伴うものである可能性もある(過去の調査においてもⅡa層相当の土層中の遺構は検出がかなり困難であった)。

土器片は、すべて同一個体である。深鉢の破片であるが、器形全体を復元することはできなかった。また、一括出土したものの他に3D・2D・5Dグリッド出土の破片も図示してある。1は、胴部が緩くびれる器形で、羽状縄文が施される。胎土に雲母片・石英粒を含み、焼成は良好である。繊維底は見られない。外面は茎状工具(?)によるヨコ方向の調整後、RLおよびLの縄文を交互に施す。この羽状縄文はやや雑であるが、菱形(X字)状を呈している。また、外



第 8 図 一括土器平面図・エレベーション図

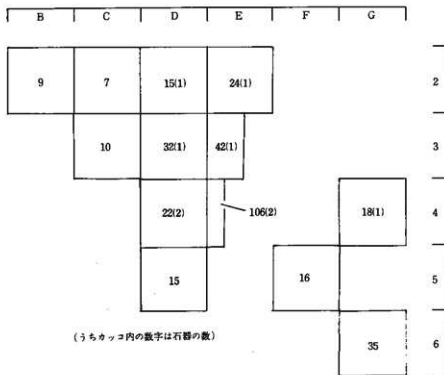


第9圖 一括土器および凹石 (S=1/3)

面には炭化物の付着が認められる。内面は指頭圧痕が割合顕著に残っており、ヨコ方向の調整後、ヨコミガキをおこなう。所属時期は前期中葉と考えられる。2は凝灰岩製の凹石である。横断面四角形の柱状の素材を用いており、その一端は折損したような破断面となっている。大変柔らかい石材で、水洗時には表面が溶け出すような状態であった。側面は4面すべてにそれぞれ2ヶ所の凹みを有する。本遺跡においては、これまでも前期の凹石が多く検出されているが、かなり柔らかい石材、もろい石材を用いているものがあり、そういった素材のものほど凹みの数が多い傾向を示すようである。

3. 黒耀石集中 (第10・11図)

後述する配石遺構の範囲確認の際、3・4 Eグリッド耕作土中より、黒耀石切片がかなり集中して検出された。検出レベルは配石遺構とはほぼ同じである。検出土層は耕作土 (I層) 中であるが、石鏃・石鏃および2次調整を有する切片・微細なチップも含んでいた。1号小竪穴との関連が予想されたため、ローム層上面にいたるまで精査を行ったが、床面等は検出されなかった。黒耀石片はほとんどが配石遺構の東側 (斜面下側) から検出されたほか、黒耀石集中のすぐ北側か



第10図 各グリッド出土黒耀石集計図

らは須恵器・土師器片が同レベルで検出されているため、あるいは過去において他の地点の遺構部分の土が移動された結果とも考えられるが、攪乱によって遺構が破壊された痕跡である可能性もある。いずれにせよ、微細な剥片や石器の未成品・失敗品と思われるものを含んでいるため、縄文時代の黒曜石を利用した石器製作址に関係があるものと考えられよう。

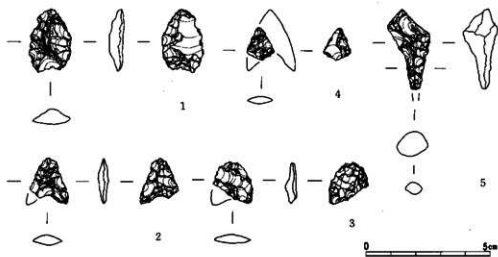
黒曜石集中部分より検出された石器のうち、定形的な石器に近い形状を有する5点を第11図に示した。石材はいずれも黒曜石で、石鏃の製作段階における破損品とみられるものが4点ある。

1は、石鏃の未成品である。平面形態は概ね完成品の石鏃に近いが、先端に相当する部分を欠損し、製作作業が中断されているものと考えられる。現在長2.5cm、幅1.7cm、厚さ0.6cmを計る。剥片を素材とし、腹面に素材の主要剥離面を広く残している。二次加工は背面の全体と腹面の片側辺および基部付近に施されている。いずれも比較的粗い剥離で、細部の仕上げに至っていない段階において作業が中断している。また、脚部のえぐり込みも十分でなく、両脚は成形されていない。

2も石鏃の未成品であろう。片脚を欠損する。現在長1.8cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを計る。すでに完全な両面加工が施され、両側縁や基部などには細かい連続的剥離も認められ、石鏃としての形状はほぼ整っているが、先端部は作出に至っていない。細部仕上げにはいっていないながら、片脚の破損によって製作が放棄された段階を示すものと考えられる。

3は全面に両面加工の施された石器で、石鏃の未成品である可能性が高い。石鏃の製作途上のものとしてみると、片脚相当部分を欠損し先端部も未成形である。現在長1.6cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを計る。二次加工は比較的粗いものが連続的に施されている。

4は両面加工石器の小破片であるが、形状や調整剥離から石鏃の身部破片と考えられる。整った二次加工が認められるが腹面には素材剥片の主要剥離面が残存している。



第11図 黒曜石集中出土石器(2/3)

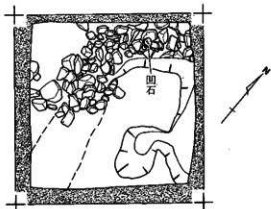
5は石鐘の破損品である。細身の石鐘で、つまみ部は厚く錐部はやや薄い。先端部を欠損しており、現在長3.2cm、幅1.7cm、厚さはつまみ部で1.0cmを計る。つまみ部分には原石面を残しており、形状からみてやや分厚い原石片を素材として製作されたものと考えられる。つまみにはわずかな調整刻痕が認められるのみであるが、錐部分には両縁辺から入念な二次加工が施され成形されている。錐部分の断面形は菱形に近い凸レンズ状を呈している。

4. 配石遺構 (第13図)

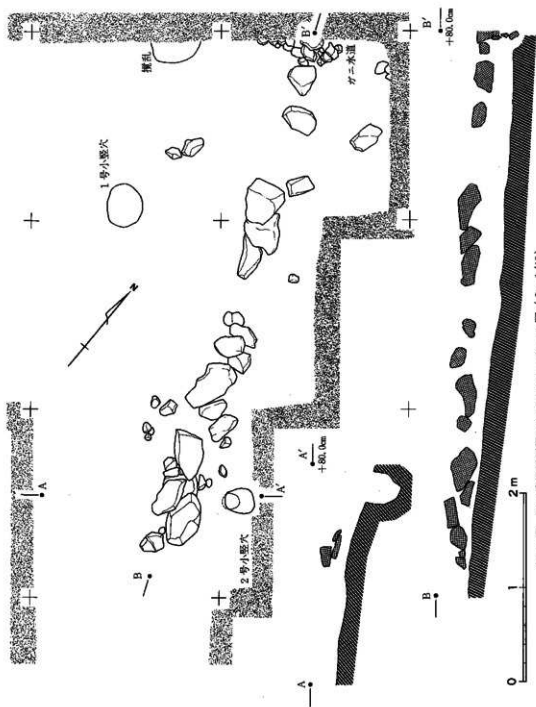
Dラインを掘り下げた際、人頭大の礫の集中が認められたため、Eライン側の拡張・掘り下げを行った。配石は南北方向に近く、ほぼ直線的に配置されており、レベル的には北側に向けてやや傾斜していた。礫は30~40cm大の礫を中心としており、やや重なりあうような形で積まれていた。また、配石遺構は、南北端が後述するガニ水道(暗渠廃水)により破壊されていた。遺構の性格であるが、現在の畑の境界(段差)にはほぼ平行でもあり、耕作土中の検出でもあるので、過去における畑の境界石等であると考えられる。なお、前述したように本遺構のすぐ東に2号小堅穴が位置しているが、両遺構の関係は明らかでない。所属時期は、ガニ水道に切られていることから、近世~近代であると考えられる。遺物は、配石の間より縄文土器片が数点検出されているが、混入品であろう。

5. 暗渠排水 (第12・16図)

4D~3D・Eグリッド、2Eおよび5Fグリッドにおいて、暗渠排水が検出されている。いずれも、ローム層に幅40cm・深さ50cmほどの溝を掘り込み、拳大の礫を詰め込んでいる。礫の間には土が余り入り込まず、空隙があった。所属時期は現代である。暗渠排水(ガニ水道)は、当地方でも沖積地の水田などでよく構築されており、構造も木の板を組み蓋をするもの、穴のあいたビニールパイプを埋設するものなど様々である。溝に礫を詰め込むものは、本区のような凹地の畑などに構築されるようである。近世以降に構築されたものが多い。なお、5Fグリッドの石組み中から、凹石(第16図1)が1点検出されている。暗渠排水構築の際、ほかの礫と共に転用されたものと思われる。



第12図 5Fグリッド暗渠排水水平面図(S=1/40)



第13図 配石遺構平面図およびエレベーション図 (S=1/40)

6. その他の出土遺物 (第14~16図)

遺構外から縄文土器片・土師器片・須恵器片・陶器片および石器類が検出されている。ほとんどが耕作土中の出土である。

縄文土器は、前期から後期にわたるものが検出された。1~11は前期中葉から末葉、12~18は中期、19は後期に属するものと思われる。

1~6は縄文のみが施された土器片である。いずれも繊維痕は残らない。1は胎土に石英粒と雲母片を多く含み、Lの縄文が施される。焼成は良好だが内面は粗い。2は、胎土に雲母片と多量の石英粒を含む。RLの単節縄文が施され、内面には指頭圧痕が残る。焼成は良好で暗褐色を呈する。3は胎土に石英粒と砂粒を含み、LRの単節縄文を施し、内面には指頭圧痕が残る。やや淡い茶褐色を呈し、焼成は普通だが細かい気泡が残り、やや粗な感じがする。4・5も単節縄文が施される土器片で、4は胎土に砂粒・石英粒を、5は石英粒・雲母片を含む。6は口縁部破片で、波状口縁の頂部にオサエを加え切り欠き状の凹部を造りだしているらしい。胎土に雲母片と石英粒を多く含み、焼成は良好でやや淡い褐色を呈する。

7はLRの縄文を施した後に半截竹管で横位のコンパス文を加える。胎土に石英粒・雲母片を含むが繊維痕は残らず、内面は丁寧に磨かれて平滑である。焼成は良好で、暗茶褐色を呈する。

8・9は、竹管文が施される。8は胎土に砂粒・石英粒を多く含む。竹管による爪形の連続刺突文にやはり竹管による平行沈線を添える。その後、連続刺突文の間に竹管の円形刺突文を加えている。9も同様の施文が行われるが、地文として縄文が薄く残る。また、胎土に微細な雲母片を含む。内面は8・9いずれも丁寧なナデの後ヨコミガキが加えられており、平滑である。焼成は良好で、茶褐色~暗茶褐色を呈する。

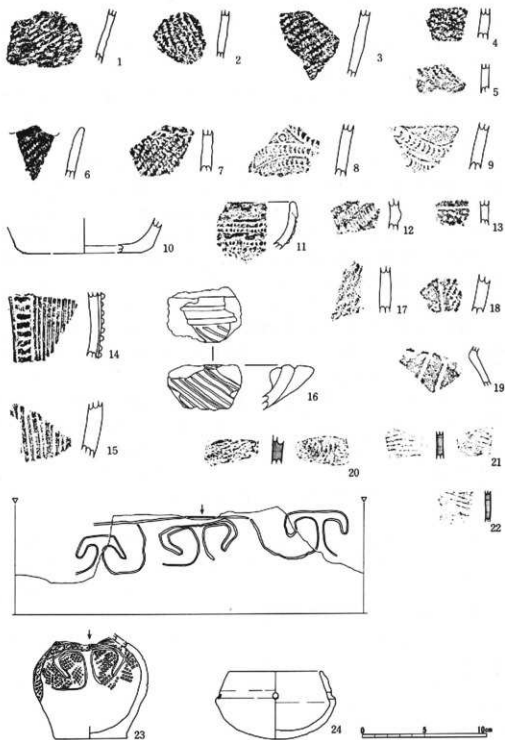
10は底部の破片である。胎土に多くの雲母片と石英粒を含む。焼成は普通だが、やや脆い。

11は口縁部の破片であり、胎土に石英粒と雲母細片を多く含む。口縁部再上段の輪積痕を意識的に残し、口縁までを無文帯としている。口縁部下には地文の縄文が施され、2条1組の細い粘土紐を横位に張り付けた後、竹管による細かい押し引きが加えられている。2組の押し引き文の間には、ソーメン状の細い粘土紐による波状文が張り付けられる。内面から口縁外側にかけては丁寧なヨコナデが施されている。焼成は良好であり、やや淡い褐色を呈する。

12は、隆帯の両側に連続爪形文が加えられる。焼成は良好で明茶褐色を呈する。

14・15は竹管による縦位の条線が施されたものである。14は胎土に石英粒を含み、粘土紐の張り付け文による縦位区画が加えられる。内面は縦位の丁寧なタテミガキである。焼成は良好で、暗茶褐色を呈する。15は胎土に石英粒・砂粒を多く含み、焼成はやや甘い。外面は淡茶褐色、内面は黒褐色を呈する。15は16と同一個体である可能性がある。

16は深鉢口縁部の破片で、口唇部を肥大させ、沈線文を加えている。



第14図 遺構外出土土器及び採集品 (S=1/3)

13は、沈線による区画と棒状工具による刺突が加えられている。

17は胎土に石英粒と赤茶褐色粒子を含む。縄文が施される。焼成は良好、淡茶褐色を呈する。

18は胎土に砂粒と赤茶褐色粒子を含む。沈線により区画された磨消し縄文が施され、焼成は良好、明茶褐色を呈する。

19は胎土に砂粒・赤茶褐色粒子を含む薄手の土器片で、磨消し縄文が施される。内面は丁寧に磨かれ、焼成は良好である。

20・21・22は、須恵器壺類の胴部破片である。

土師器は細片が多く図示できなかったが、甕・坏・内黒の台付坏等の破片が検出されている。

23・24は本遺跡の調査にあたり地元有賀区の方々に資料の提供をいただいたものであり、いずれも本区と0区の間付近からの採集品である。23は小平幸重氏採集の底面に木葉痕を残す弥生時代中期の壺形土器で、肩部以上を欠損している。胎土に石英粒・雲母片を含み、縄文施文後おそらく4単位のT字形磨消し文が沈線により描出され、さらに胴部下半にはミガキが加えられている。焼成は良好で褐色～黒褐色を呈する。

24は田中由氏蔵の須恵器を模倣したと思われる土師器環である。胎土は精良、底部は丸底で、胴部との境界に稜を有する。稜の上側には1条のやや強いヨコナデが加えられ、胴部は内傾して口縁にいたる。また、稜の上側には4箇所の焼成前穿孔が行われている。整形は、底部外面が手持ちヨコヘラケズリ後丁寧なミガキ、底部内面は指オサエ後粗いヨコヘラミガキをおこなう。胴部と口縁部は内外面ともヨコナデ後ヘラミガキを加える。色調は灰褐色～黒灰色を呈するが、黒色研磨土器を意識していた可能性もある。口縁内側は破損が目立つ。口縁部下の穿孔については資料を管見した限りでは、今のところ類例が見当たらない。今後の検討が必要であろう。

遺構外出土石器のうち主なものを第15・16図に示した。第15図の1～6は石鏃およびこれに類するもの、7は石匙、第16図の1～4は凹石・磨石である。

1は黒曜石製の有茎石鏃である。先端部および片脚をわずかに欠損し、現在長2.9cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを計る。二次加工はほぼ全面に及んでいるが、両面ともわずかながら一次剥離面を残している。こうした調製剥離は比較的精緻に施されている。

2は黒曜石製の両面加工石器で、二等辺三角形を呈しやや大型である。先端部を欠損する。片脚の形状が定型的でなく、また二次加工は全面に及んでいるものの細かい調製剥離があまり認められないことから、石鏃もしくは石匙の未成品である可能性がある。現在長2.6cm、幅2.0cm、厚さ0.6cmを計る。

3は黒曜石製の石鏃である。長さ2.3cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを計る。半両面加工品で、表裏に一次剥離面を残し、腹面側には素材剥片の主要剥離面が広く残存する。二次加工は縁部に集中し、脚部のえぐり込み加工は背面側にのみ認められる。

4は黒曜石製の周辺加工石器である。形状は石鏃に近く未成品である可能性がある。長さ2.5cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmを計る。両面に一次剥離面を残し、とくに腹面には素材剥片の主要剥離

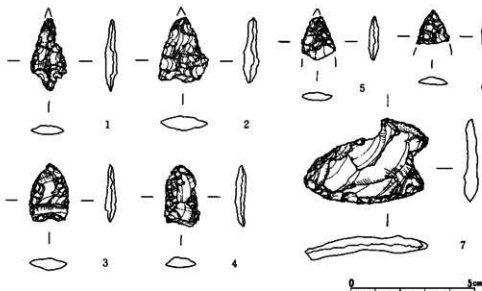
面が認められ、バルブも先端部側に残存している。二次加工は縁辺に集中している。

5・6は黒曜石製の石鏃破片である。5は先端部側破片で、現在長1.4cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmを計る。背面側は二次加工が全面を覆い、細部調整も施されているが、腹面側は素材剥片の主要剥離面を広く残し、周辺部にのみ加工が認められる。6も先端部側破片であるが、先端もわずかに欠損している。現在長1.7cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを計る。二次加工はほぼ全面に及んでおり縁辺部には細部調整も認められるが、腹面には素材剥片の主要剥離面をわずかに残している。

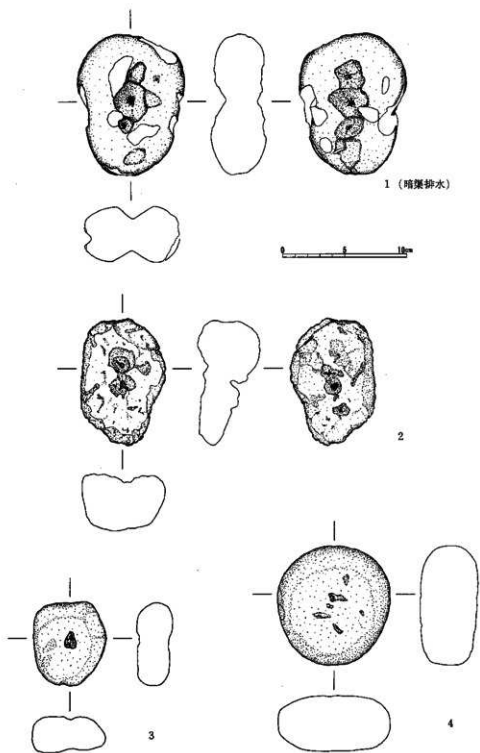
7は頁岩（灰色）製の石匙である。長軸長5.0cm、短軸長3.4cm、厚さ0.7cmを計る。縦長剥片を横位に使用して作製された形態の整った石匙で、腹面には素材剥片の主要剥離面を広く残している。背面にも一次剥離面と自然面が残存する。二次加工は周辺部に限られ、刃部加工は背面側では連続的に精緻に施されている。腹面側の加工は、刃部加工以外はえぐり込みの加工のみである。

第16図1は暗渠排水から検出された凹石で、平面形がタマゴ形の偏平な安山岩質の礫を利用しており、転用されたためか所々に新しいキズ（ケズリ痕）を残している。片面に2箇所、その裏面に3箇所の凹みを有するほか、側面にも1箇所の凹みをもつ。凹みの断面形はU字形ではなくスリバチ状を呈する。2は安山岩製のやや不整形な凹石で、両面に凹みを有する。裏面に1箇所、えぐれたような深い凹みがあるが、恐らく素材にあった自然の穴と凹みが重なったものであろう。3は小型の安山岩製凹石で、平面形は不整形な五角形に近く両面に浅い凹みを有する。かなり柔らかい素材を用いており、水洗時に表面が溶け出すような状態であった。

4は安山岩製の磨石である。平面形は円形に近い卵形で、表・裏両面とも磨面となっているほか、側面も整形のため部分的に磨られているようである。表・裏両面には数箇所小さな凹みが認められるが、人為的なものであるかどうかは明確でない。



第15図 遺構外出土石器(1) (S=2/3)



第16图 遺構外出土石器2(S=1/3)

表1表 各グリッド出土土器集計表

グリッド	縄文土器				土師器		須恵器	灰 陶器	釉 器	その他の 陶器等	計
	前期	中期	後期	不明	壺類	坏類					
2 B	3	2	1	0	0	1	1	0	0	8	
2 C	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
3 C	10	2	0	0	2	0	1	0	0	15	
2 D	9	0	0	2	1	1	1	0	2	16	
3 D	9	0	0	0	0	1	2	0	0	12	
4 D	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2	
5 D	5	1	0	1	1	1	0	0	1	10	
2 E	2	0	1	5	2	3	2	0	0	15	
3 E	1	1	0	2	1	3	5	1	2	16	
4 E	1	2	0	3	3	7	2	0	2	20	
5 F	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	
4 G	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	
6 G	0	2	0	1	0	0	2	0	1	6	
表採・排土	1	1	0	1	0	0	2	0	2	7	
合計	43	11	2	16	9	17	19	1	12	130	

第2表 各グリッド出土黒曜石集計表

グリッド	原石	剥片・石核	2次調整 ある剥片	定形の石器	黒曜石計	その他の石器
2 B		5	4		9	凹石 1
2 C		7			7	
3 C		10			10	凹石 1
2 D		14		石鏃(欠) 1	15	凹石 1
3 D		30	1	石鏃 1	32	チャート石匙1
4 D	1	18	1	石鏃(未?1) 2	22	
5 D		14	1		15	
2 E		22	1	石鏃 1	24	チャート剥片1
3 E		39	2	石鏃(?) 1	42	
4 E	2	90	12	石鏃(未1・欠1)2	106	磨石 1
5 F		12	4		16	凹石 1
4 G		17			18	凹石 1
6 G		34	1		35	
表採・排土		7	1		8	
合計	3	319	28		359	7

V 調査のまとめ

発掘調査の結果

今回調査の第4区という地点は、遺跡全体からみると、千鹿頭社遺跡の最北端にあたる。

北隣する地籍は千鹿頭社の神社境内となり、さらに北部は山裾となって鐘鐺場遺跡とつながっている。地形的には有賀峠の中沢川の形成した扇状地扇状部北端で、傾斜のもっとも低い部分で、さらに北側の鐘鐺場の山裾ということもあって、東南向きの日照のよい窪地に神社が存在する。しかし神社境内に豊富な湧水がみられるように、神社を中心に周囲は地下水の高い所で、いわゆるじくたみ地である。

第4区は千鹿頭社の南隣の一段高い畑であるが、じくたみとはいかないものの、湿度の高い地質である。したがって近世、農業においてガニ水道を設置して乾燥化を図った遺構の発見もあった。

発掘地は従来の農耕による破壊が著しいものとみられる。検出遺構中小竪穴2個は、現在の所性格は不明。黒耀石集中については黒耀石製の石鐮の製造過程を示すのではないかとみられる。未製品、失敗品、そして製作工程で出る削片、剥片などがある。縄文時代前期中頃の石器製作工房的なあり方とみられる。

遺物は縄文前期中葉の一括土器の出土（完形にならない）があり、遺構も同時期とみるべきものである。

千鹿頭社遺跡および十二ノ后遺跡は、有賀峠扇状地の扇状部中央に展開する、縄文早期から弥生・古墳・奈良・平安・中世の複合遺跡である。そのうち縄文時代では、早期末～前期にかけての遺跡は注目されるもので、すでに中央道埋文包蔵地発掘調査において、明らかになった部分が多い。ことに縄文早・前期遺跡では、黒耀石製の鋭利な石器製作に特徴がある。本遺跡の黒耀石集中箇所はそれら遺構に関係をもつ一部分かとみられるものである。

ただ、遺跡の広まりから考察すると、縄文早・前期遺跡範囲の末端部、つまり遺跡の限界で、千鹿頭神社境内地はもっと異った利用地、つまり生活拠点というより、精神生活の拠点としての意味の地域と考えられなくもないのである。

有賀峠と遺跡・信仰体

有賀峠は赤石山脈の最北部の、諏訪盆地と伊那谷を結ぶ最大の峠である。現在は辰野町平出から諏訪市豊田有賀に通ずる県道諏訪一辰野線が通っている。辰野地区から諏訪に通ずる峠路は、主要な有賀峠を中心に両側に、矢垂（小坂）峠・神場峠。東側に馬越峠・北峠（唐松峠）・中峠・真志野峠がある。これらの峠は諏訪側が急峻な下りであるため、峠路が合流して、小坂峠、有賀峠、真志野峠となっている。有賀峠は平出口から緩い傾斜で峠頂上にいたり、急短路で有賀に

下るといふ、比較的容易な峠であり、交通に多く利用されたものである。

交通に利用された点でもっとも注目される事例をあげてみよう。縄文時代早期末から前期初頭に伊那谷の宮田村中越遺跡に一大集落を形成した、中越式土器の文化中心地がある。土器は極く薄手指瓦痕文、文様は細線文、器形は尖底となる土器である。この土器文化の特徴は一大拠点集落を作るが、諏訪地方では茅野市駒形遺跡。原村阿久遺跡というように、八ヶ岳西麓と中央山麓に一大拠点集落が繁栄している。駒形・阿久遺跡とも中越遺跡の強の影響下にあることは当然でその交流過程に問題があった。所が中央道埋文調査において、千鹿頭社・十二ノ后遺跡から同期の住居址が相つき（県教委はか1975・1976）、一大集落址であることが判った。つまり八ヶ岳山麓に展開する遺跡として、宮田中越から有賀峠を越え、そして峰下に拠点を作り、さらに八ヶ岳方面に進出したことが想定される。

古墳時代、辰野地区の古墳は多くない。そのなかで平出地区の御陵塚古墳・御射宮司古墳・山の神古墳はいづれも横穴式石室古墳で、御射宮司古墳は頭椎太刀を出土した。いずれも七世紀後半代とみられるが、上社前宮、蛇塚古墳の頭椎太刀と関係のあるものとみられる。古墳の様相は峰を通じ諏訪と密接な関係のあったことが窺へるのである。

弥生時代後期の土器、そして住居址のタイプが辰野地区の弥生文化と同じとの指摘も注目され峠神奉祭の石製模造品（幣）の出土が有賀地区にみられる事も、峰と本遺跡の関係を考える上に重要である。

例年の上社西の祭は、外県巡遊神事がある。午の日に外諏訪へ神使殿は巡幸地は上伊那の天龍川兩岸の水田地帯を廻っている。七日間の神事を終へると、往路と同様に有賀峠経由で上社前宮に着する。つまり諏訪信仰圏の神事、伊那谷方面に往復するさいの重要峠であった。

古い峠には峠路石の信仰がある。有賀峠には峠頂上にある積石塚。これは兩境峠との惣塚、中与惣塚と同類である。有賀峠路の約4kmは、下方から七石といわれる石信仰がある。「昇り餅」、「夜泣き石」、「女陰（おめこ）石」、「信玄駒つなぎ石」、「疊石（行者石）」、「イボ石」と、近年まで巡拝されていたという。

峠下の有賀には、古くから原始信仰とみられる信仰体がある。千鹿頭社と七御社宮司社の存在である。千鹿頭社は、嘉禎3年6月の奥書をもつ「祝詞段」の中に「有賀之郷ニウリニウタイチカト若宮」とある。天帝と千鹿頭社のことである。千鹿頭社は諏訪明神の摂末社で、上社神事に用いる鹿を調達する神であるとの伝承がある。七御社宮司社とされるのは甑原（小式原）社。不聞社、島の御社宮司社、赤石社。女帝塚（御頭御社宮司社）、若宮社、クルマ沢社である。女帝塚、若宮社、島の御社宮司社は千鹿頭社に合祀されている。

有賀の村内にはこのように原始信仰であるミシャグジの祭祀の場、また千鹿頭社が存在している。

原始・古代から近世まで有賀峠の伝承、利用は、峠口の繁栄をうながしたものであった。有賀峠は西からの新しい文物の流入口であり、千鹿頭・十二ノ后遺跡は、それを遺構、遺物の形でみせてくれているのである。

参考文献

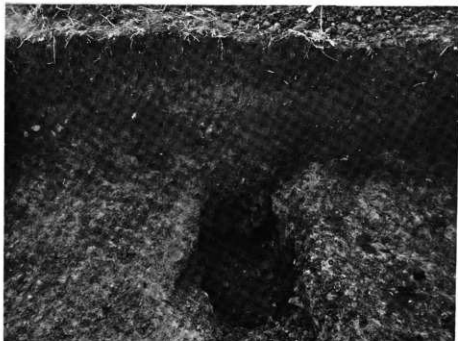
- 宮坂光昭 1969「諏訪市宮垣外遺跡」『信濃考古』27
- 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 1975 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 諏訪市その3」
- 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 1976 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 諏訪市その4」



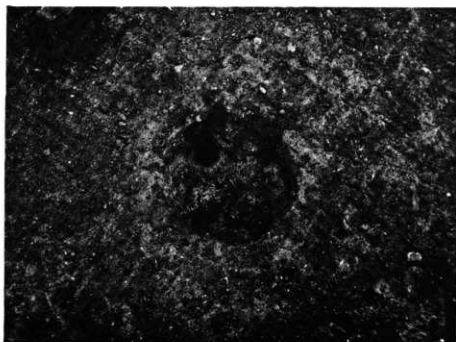
1. 調査区遠景 (右側は千鹿頭神社)



2. 作業風景



3. Dライン西壁および暗渠排水セクション



4. 1号小墜穴



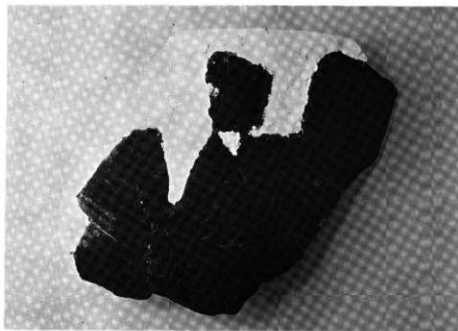
5. 一括土器出土状況（東から）



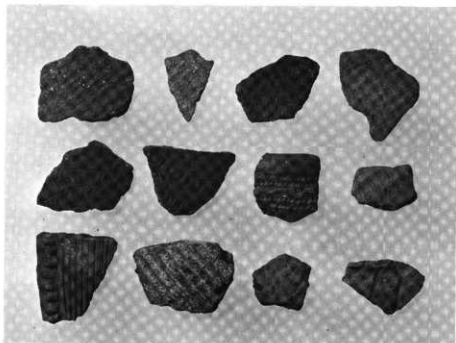
6. 配石遺構
（南から）



7. 5 F グリッド暗渠排水中間石検出状態



8. 一括土器



9. 各グリッド出土土器 (上段左より14図1・6・7・3、中段8・9・11・12、
下段14・16・18・19)



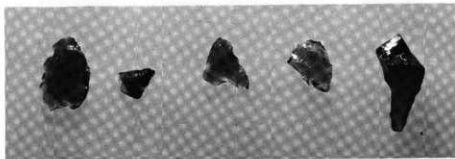
10. 千鹿頭社遺跡出土土師器



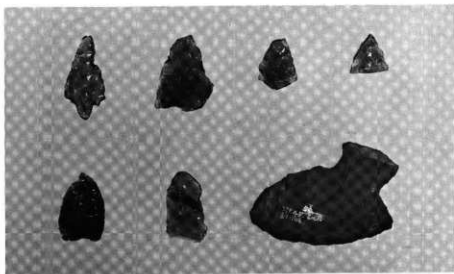
11. 千鹿頭社遺跡出土弥生土器



12. 凹石 (左・一括土器 右・噴渠排水)



15. 黒曜石集中出土石器 (左より11区1・4・2・3・5)



14. 各グリッド出土石器 (上段左より15区1・2・5・6、下段3・4・7)

千 鹿 頭 社 Ⅲ

—長野県諏訪市千鹿頭社遺跡第4次発掘調査報告書—

1990年3月30日

編集 諏訪市高島1-22-30
発行 諏訪市教育委員会
印刷 ㈱マルジョー上田印刷
